

石見銀山

大航海時代 東洋と西洋を繋いだ銀鉱山

石見銀山は、16世紀から17世紀にかけて栄えた日本最大の銀鉱山として知られている。1923年に閉山するまで、約400年間にわたり稼働し、その全盛期には世界の銀産出量の30%を占めていたという。

純粋な手作業による採掘と精錬技術により、鉱山は高度の品質と豊富な生産量で世界の注目を集めた。当時、噂を聞きつけやって来たヨーロッパの人々は（記録によれば、石見銀山は「銀王国」とまで呼ばれていた）、香辛料や絹などの「いいもの」も見つけ、東アジアの貿易に参入するようになった。いわば石見銀山は、東西の経済と文化の交流を促進する「銀の鍵」としての役割を果たしたのだ。

当然ながら、この「銀の鍵」は鉱山と港を結ぶ交通や運送システム、信仰施設、温泉宿泊施設などの建設をも大いに発展させることになった。

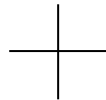
2007年、石見銀山はその歴史的価値と文化的景観が評価され、周辺の文化景観とともにユネスコの世界遺産に登録された。その構成には、銀鉱山跡や鉱山町（10ヶ所）、石見銀山と街並み（2ヶ所）、港と港町（3ヶ所）が含まれている。



更なる詳細情報や、石見銀山の文化景観や出土品、全体像を示す映像や模型などは、**石見銀山世界遺産センター**にてご覧いただけます。

〒694-0305

島根県大田市大森町イ1597-3



- 世界遺産
- 伝統建築群と温泉
- 古さと新しさの融合
- 静けさと活気の共存
- カルチャーとスピリットの旅
- 隠れた名所

今日の石見銀山は、

伝統技術による銀の生産跡が良好に保存されており、江戸時代の生活風景が垣間見える。また、若者たちの移住により、新鮮感と活力も吹き込まれる。

狭い路地を歩いてみれば、5時の鐘の音と夕日を背景にラッシュで下校する小学生たちに出会えるかも知れない（彼らが通う大田市立大森小学校は2022年に創立150周年を迎え、全国的に高齢化が進む中、在学は近年増えているとのこと）。また、古民家を改装したゲストハウスや、起業を支援するシェアキッチン、オランダ出身のフォトグラファーのアトリエなどの前も通り過ぎるだろう。夜になると、銀座から移住してきたバーの店主が灯す温かな明かりが道を照らし、独特の雰囲気を出し出す。カフェのショーウィンドウに貼られたポスターに、隣のレストランの店員がモデルとして登場していることに気づく人もいるはず。そして想像を巡らせる。あのバーの片隅にいつも座るオランダ人フォトグラファーの姿を。＊

石見銀山では、さまざまな背景やストーリーを持った人々が集まり、互いに支え合いながらゆるやかなネットワークを築いている。のんびり巡ってみれば、そのネットワークや、ここに息づく古さと新しさ、静けさと活気が混在する特別な雰囲気を肌で感じ取ることができるだろう。

「社寺」と日本独自の宗教信仰

日本では古来より「神道」が信仰されてきた（祖先崇拝や一神教と対照に、万物に神が宿るという考え方である）。仏教が日本に伝わると、神道と仏教が融合することにより、新たな信仰体系が形成され、その融合の象徴として「社寺」（神社と寺院）が現れる。ところが明治時代初期、新政府は神仏分離政策を打ち出し、社寺から仏教的要素を排除することで、神道の中心的地位の回復を心がけた。よって社寺は一時存亡の危機にさらされることになったが、幸運にも残された数少ない社寺では、現在もこのような融合と、そこに反映される世界的にも稀有な究極の包容性を見ることができ

江戸時代の生活風景

石見銀山では、伝統的な建築物が持続的に使用できるよう、毎年検査と鑑定の上で、2～3棟の建築物を修繕している。

周辺のスポット 出雲大社

日本では旧暦の10月に「神無月」という別称があるのだが、それを出雲地域では「神在月」と呼んでいる。なぜなら、この時期には、日本中の神々が自らの神社を離れ（無）、出雲大社に集まり（在）、人間界の重要事項について話し合うのだ。また、日本最古の文献『古事記』にも出雲神話が数多く記されており、出雲大社は日本の神社制度の起源とも言われている。

01 02
03 04
05 06
07 08
09 10

- 01 02 西楽寺と龍御前神社
- 03 04 重要文化財「熊谷家住宅」の内部
- 05 06 「大森銀山重要伝統的建造物群保存地区」では、伝統的な雰囲気と実用性を両立させようと、自動販売機も「特注デザイン」に変身
- 07 08 「温泉津重要伝統的建造物群保存地区」にある古い温泉、元湯、薬師湯と明治時代の風情
- 09 「大森銀山重要伝統的建造物群保存地区」の放課後の小学生たち
- 10 出雲大社の最も「バエる」注連縄。その重さは5トンを超え、日本最大の注連縄と言われている